巻頭言

論文を書くことは医療人にとって義務である

徳島赤十字病院副院長　武田　芳嗣

「論文を書くということは医療人にとって義務である」、と書くと多くの人はそんなことはないだろうと反発されると思います。勿論、「患者さんから診療を請われればそれに応えなければならない」とか、「就業時間にはちゃんと病院に来て仕事をしなければならない」等というような義務とは全く意味が異なります。医療に関わるもの、特に医師であれば、日常臨床において今まで自分が遭遇したことのない疾患に出会い、診断や治療法がわからず途方にくれたことがあると思います。そんなとき、一編の症例報告によって診断や治療法のヒントを得てうまく対処できたことを経験したかたもたくさんいるでしょう。そうやって症例報告で助けられたのであれば、皆さんもお返しをしなければいけません。滅多にない症例に出会ったり、治療法を工夫してうまく治療できた経験があれば、日本中いや世界中のだれかの役に立つように報告する義務があります。

臨床研究とは、臨床の上で、ちょっとうかんだ疑問が、まだ答えがわからなかったり、意見が分かれている場合に、遂行可能な研究計画を立てて、自分なりの答えを得ることだと思います。勿論当院のような市中病院では、大規模な臨床研究などは不可能です。しかしたとえ小さなことでも、世界中のどこかで、同じような疑問を抱き、診療に困っている人がきっといるはずです。あなたがその答えを教えてあげることで、きっと喜んでくれると思います。

そもそも我々が享受している現代医学は、昔からの医療に携わったたくさんの人たちの経験の上になりたっているわけです。近代以降、その多くは論文という形で世界中に広まり、医学の発展につながっています。我々はその恩恵を被っているのですから、どんなものであってもあなたが、世の中の人が知らないことを知ることができたのであれば、独り占めにせずに公表して、医学の進歩に貢献する義務があります。「こんなちっぽけな自分の経験やしょうもない研究結果なんて、医学の進歩に貢献するはずがない」と思われるかたもいるかもしれません。確かに残念ながら貢献しないこともあるでしょう。しかし役に立つかどうかは我々が判断するのではなく、世の中の人、それも現在この世に存在する人たちだけでなく、未来の人が判断するのです。そのためにはとにかく記録としてこの世に残しておく必要があります。

だんだん話が大きくなって、ますます論文を書こうという気が失せるかもしれませんが、せっかく自分が苦労して得た経験や時間を費やして得た研究結果をそのままうやむやにするのはもったいないではありませんか。本誌は peer review journal ではありませんから、厳しい査読を受けて意気消沈したりすることはありません。しかもただで英文校正をしてくれるので、インターネットを通じて世界の人にアピールができます。お世話になったらお返しをするのが人の道です。気軽にどんどん書いて投稿してください。